

重要な構成要素「^やゑびす家」

建築（店舗）：明治後期～大正初期

参道の景観を構成する要素

「^やゑびす家」は、柴又の歴史ある名物「川魚料理」を生業とする料亭で、参道がスタートする重要な位置に立地します。元々は、この敷地に居住していた農家であり、草団子屋から明治期に料亭の営業に転じたといえます。参道に面した主屋は、切妻造^{きりづまづくり}瓦葺き、木造2階建てですが、平屋部分は大正元年頃に明治期に建てられた納屋^{ひきや}を曳家したものとわれています。広い間口の店舗と厨房が参道に接し、特に^{っし}厨子2階建ての店舗が重要で、柴又では最古の部類に属します。店舗正面^{けたゆき}桁行方向に通る差物が構造材であると同時に壁面の重要な意匠ともなっています。

広大な敷地には複数の棟が建ち並び、最奥部の離れの建物は、切妻屋根で妻入り^(注)、木造平屋の複数の棟から成り、かつては^{こうしん}庚申の日に前泊して宵越しのお参りをする参拝者向けの宿泊営業に利用されていました。また、参道沿い以外の敷地の東西北側の3面には塀が巡らされ、参道脇には松の老木やクロボクを配し、祠を祀る空間が設えてあり、柴又帝釈天や山本亭の庭園とともに柴又の^{せいひつ}静謐な雰囲気^{せいはつ}を醸し出しています。

大正から昭和の建築様式を維持し、かつての参詣文化を伝える柴又帝釈天の参道に位置する建築の特徴を示す重要な要素で

す。柴又駅から参道に入る地点にあって棟の向きを合わせてその連続性を担保するとともに、駅に向かう帰途においては「ゑびす家」の屋号を見せ、参道側と柴又街道側の両側面が柴又の文化的景観のアイストップ的な要素になっています。



大正から昭和初期頃の参道入口とゑびす家（個人蔵）

（注）妻とは棟と直角の壁面のこと。妻入りは、妻に出入口を設ける建築形式。また、妻を正面とするもの。（広辞苑第七版）